

## 平成 30 年度小さな拠点・地域運営組織 近畿ブロック研修会 開催概要

### (1) 全体概要

- ・ 日 時：12月5日（水）13：30～17：00
- ・ 会 場：兵庫県農業共済会館 大会議室
- ・ 出席者：91名（地方自治体職員約8割、地域団体約1割等）

### (2) 近畿ブロックの特徴

- ・ 地域運営組織がある市町村の割合は、近畿地域 43.2%であり、全国平均（38.8%）をやや上回る。（平成 29 年度 総務省調査）
- ・ 市町村版総合戦略に位置づけて小さな拠点が形成されている市町村は、近畿地域 14.5%であり、大都市圏を有することもあり、未形成の市町村数も多くなっている。（平成 30 年度 内閣府調査）
- ・ 広聴と主体性開発を軸に地域住民の意識啓発や参加促進を図るアイデア会議についての講演とグループワーク、スーパーの閉店を契機に、単なる買い物場所ではなく、地域自ら課題解決していく拠点として再生し、取組を拡充してきた事例紹介など、地域での取組前進につながるようなプログラム構成とした。

### (3) プログラム

時間	タイトル	講師
13:30～13:35 (5分)	開会	
13:35～13:50 (15分)	国の取組説明 「小さな拠点・地域運営組織に関する取組」	屋敷 昌範氏 (内閣府 地方創生推進事務局)
13:50～14:35 (45分)	講演 「キャリアコンサルタント視点の『課題解決アイデアソン（アイデア会議）』～主体性と自己実現で新たな仲間づくり～」	米山 哲司氏 (NPO法人Mブリッジ 代表理事)
14:35～15:15 (40分)	取組事例発表 「地域拠点を中心とした笑顔あふれる安心の故郷づくり」	高田 新一郎氏 (NPO法人ほほえみの郷トイトイ事務局長)
15:15～15:25 (10分)	休憩	
15:25～16:55 (90分)	ワークショップ 「「課題解決アイデアソン」の進行ノウハウを手に入れよう」	●コーディネート：米山 哲司氏
16:55～17:00 (5分)	閉会	

## (4) 研修結果

- 1) 国の取組説明 講師：屋敷 昌範氏（内閣府 地方創生推進事務局）  
資料のとおり

2) 講演 講師：米山 哲司氏（NPO法人Mブリッジ 代表理事）

- ・ まちづくりに無関心な層に関心を持ってもらうためには、対話をして分かり合うための場づくりが必要である。また、その際には投げかけ方や表現の工夫も必要となってくる。その一つの手法として「アイデア会議」を紹介する。
- ・ アイデア会議の主な意義は「広聴」と「主体性開発」である。重要なのは、良いアイデアが出るかどうかではなく、住民の想いを知る、見える化することと、住民に主体性を持ってもらう（わがごと化）ことである。
- ・ アイデア会議の重要な役割の一つが、地域住民に「地図（行先と行き方）」を渡すことである。「地図」を持たずに闇雲にまちづくりを進めていっては、なるようにしかならない。まず、住民に自分のまちの「あるべき姿」を持ってもらう（主体的になってもらう）ことが最優先で、課題（今の姿とあるべき姿のギャップ）解決に向かう方法は様々にあってよい。
- ・ 学生や若年層に対しては、まちの課題解決のため、という方面からのみ参画を促すのではなく、そこに個人の自己実現をうまく組み合わせることで、関心を持ってもらうという考え方がある。これからの時代は、その人の個性や価値観を掴んで、うまく組み合わせることで良い地域にしていくためのプロデュースを担えるリーダーが求められる。
- ・ アイデア会議を進めていくベースとして、まずは想い（何がしたいのか）を語ってもらい、共有することが不可欠である。そして、それを語ってもらう中で、個人個人の個性や価値観についても掴んでいけると良い。そういった人材発掘がまちづくりにおける人材育成だと考えることもできる。人を中心に考えて、多様性を魅力だと思うことが大事である。



(質疑応答)

質問：若年層などを仲間として引き入れることについて、これまでの経験から、うまくいった事例や、逆に失敗してしまった事例があればご紹介いただきたい。

米山氏：「やっている人」、「きっかけがあればやる人」、「やらない人」の三層に分けた場合に、まずは「きっかけがあればやる人」を引き上げて、「やっている人」の割合を増やしていくという方法をとる。無関心層も含めてあらゆる人を一度に引き入れようとする、漠然とした誘い方になってしまうまいかないので、個々と対話をしながら一人ひとり引き入れていくのが良い。「やっている人」が7~8割と多数を占めるようになると、「やらない人」の気持ちも変わってくるものである。

3) 取組事例発表 講師：高田 新一郎氏（NPO法人ほほえみの郷トイトイ 事務局長）

- ・ 地域内で唯一の買い物場所であったスーパーの閉店に際して、地域としての今後の対応に関する協議が始まった。当初、住民の間では、買い物の不便さを嘆いたり、市役所による対策を求める声がよく聞かれ、地域の危機的状況を考えるというよりは、不安感ばかりが募っている雰囲気であった。また、協議においても、自分たちでスーパーを開店するという話までは進むものの、責任ある立場

を自ら担おうとする者が現れないために決定に至らず、難航した。

- ・ 地域住民の声を聴くうちに、商店は住民同士のコミュニケーションの場であったことが分かり、本当の問題は、買い物の不便さではなく、地域コミュニティが崩壊することであると考えた。そこで、単なる買い物場所ということではなく、地域自ら課題解決していくための拠り所となる拠点を作るという発想の転換に至った。
- ・ 地域の将来ビジョンを明確化・共有し、地域コミュニティ活性化の構想を練った。各自治会の説得は難航したが、今の状況を解決するという話だけではなく、地域の将来を考えるという視点を持って説明することで理解が得られる場面があり、大きな気づきとなった。
- ・ 現在、地域拠点「ほほえみの郷トイトイ」では、ミニスーパー機能、移動販売、手作り惣菜販売、介護予防など、様々な取組の場となっており、コミュニティ機会創出の拠点となっている。移動販売車の担当者間では、物を売りに行くのではなく、人と話をしに行くのだ、という意識の共有を徹底しており、会話の中から地域ニーズを見つけることを心掛けている。
- ・ 地域拠点は、地域の人や資源、守られてきた伝統・歴史を未来につないでいく場所である。農業等で後継者不足の問題が深刻だが、Uターンや、新しく地域に入ってくる人に引き継いでいくための拠点としての役目を果たすことで、地域に可能性を生み出していくことができると考えている。



(質疑応答)

質問：必要な事業資金はどのように得ているのか。また、事業を行う場合、組織は法人化するべきなのか。

高田氏：補助金等も活用しているが、ミニスーパーや移動販売の事業収入をベースとして運営している。商圈が狭いため、様々な事業を掛け持ちすることで収益性を維持して成り立たせている。運営場所については、当初は、所有者であるJAの理解により無償で借りていたが、現在は賃料を払っている。

内閣府：コミュニティバスの事業を行う場合のように、法人格が必要になる場合はあるが、それ以外の場合には、必ずしも法人化する必要はない。尚、法人化の際には、NPOや株式会社など様々な法人形態が考えられるが、形態によって優遇措置等のメリット・デメリットがあることに留意いただきたい。また、より公的な性格を持った新しい法人形態を作ってほしいという要望は多く寄せられており、現在、研究会も立ち上げて検討を進めている。

#### 4) ワークショップ ●コーディネート：米山 哲司氏

アイデア会議の進行の考え方やコツについて、体験を通して学ぶことを目的としたワークを行った。



##### ■ワーク①

4名前後のグループを作って、自己紹介(名前、所属、『最近買った、ちょっと良い物』)を行う。

(講師による解説)

初めに参加者の発言機会を設けることで、その後も発言しやすくなる。

各々で自己紹介の所要時間が異なるが、長くても短くても批判をするべきではない。時間の使

い方についても一つの個性と考える。

自己紹介の内容は、お金や時間の使い方に関連があるものにとすると、その人の価値観が見えてきやすい。

#### ■ワーク②

まず、講師からの質問に対して、参加者は3択のハンドシグナルで回答する（「カラオケは好きですか？」⇒親指の向きによって「好き」「普通」「嫌い」を示す。）。次に、その理由についてグループ内で話し合う。

（講師による解説）

クローズドクエスチョン→オープンクエスチョンという進行にすると、参加者は意見を語りやすい。

対話を深めて互いの個性が分かることで、意外なコミュニティが新たに生まれる場合がある。新しい人材を引き入れることを考える際には、考え方を一方的に押し付けるのではなく、話し合いの中で見出された個人の個性や嗜好を、何らかの形でまちの課題解決の取組につなげていくという考え方が必要である。

#### ■ワーク③

「みなさんのまちのイメージを、ネガティブな方向性の形容詞で表すと何になるか？」という問い対しての意見をグループ内で話し合う。

（講師による解説）

初めから「まちのあるべき姿は？」と尋ねても意見が出てきにくい。逆に、「こうはなりたくない」というネガティブな方向から考えると、意見が出やすいものである。

#### ■ワーク④

各々が、「わがまちに若者を増やすためにどうすればよいか。」を考えてA4用紙に書き出す。その後、グループ内で、記入した紙を見せながら意見を紹介して話し合いを行う。

（講師による解説）

紙を見せながら話し合うことで、発案者が責任を負う形ではなく、アイデア自体に注目して話し合いを進める雰囲気を作られる。アイデアを探すという姿勢が大切である。

一般論や他人の例を語るのではなく、自身の意見を述べるのが望ましい。



#### ■ワーク全体に関する講師の解説

アイデア会議は、いかに「広聴」と「主体性開発」につなげるかを考えて行う。無関心層に関心を持たせるためには仕掛けや表現方法を工夫する必要がある。